

『唯我独尊な男 下』

著:あすか

ill:タカツキノボル

額にうっすらと汗を滲ませながらテイラーがさまざまな思いに駆られながらも、必死に恭夜を蘇生させようとしていると、廊下を慌ただしく走る足音が聞こえた。医療班が駆けつけたのだらうと、テイラーが顔を上げた。その視線の先にいたのは機材を持った数名の医療班の人間だった。

だが、今一番見たくない男の顔が真っ先に視界に入った。

「ジャッ……ク」

テイラーは恭夜の横に座り込んでいる己の身体が、突然硬直したような気がした。気づかせるなと命令したはずなのに、どうしてジャックがここにいるのだらう——テイラーはそんなことばかり考え、状況説明を忘れていた。

「何分だ？」

ジャックはテイラーをどかせ、恭夜の真横に膝をつく。その傍で医療班が機材を手慣れた様子でスタンバイさせていた。

「あ……」

「何分だと聞いているんだ」

どういう意味かすぐに分からなかったテイラーが顔を上げると、ジャックはぞっとするような表情をしていた。

「何度も言わせるな。息が止まってから何分経った？」

意外に冷静なジャックの声が、テイラーの背筋を余計に凍えさせる。医療班がバックマスクと呼ばれる手動式人工呼吸器を恭夜の口に当てがった。

「たぶん……五分くらいだと……」

額の汗が頬を伝うのが分かるのだが、とても拭う気にはなれない。

「そうか、君たちはさっさと、自分たちの仕事をしろ。死なせるわけにはいかないんだっ！」

ジャックは、恭夜の胸元をはだけ、今までテイラーが繰り返していたように手で数度力を込めて心臓が再び動きだすよう刺激を与えた。

隣から医療班の人間が、恭夜の口から強制的に酸素を送り込むためにバックマスクを当てがっているものの、吸い込んでいる気配がない。そんな恭夜を挟みジャックの前で、医療班の人間がパッドを用意し、電気ショックの準備を整えていた。

「チャージオッケーです。離れてください」

男の声にジャックの手が引かれ、恭夜の胸に電気ショックが与えられた。だが骨まで砕きそうなほどの音が響いたかと思うと、恭夜の身体はバウンドし、床に伸びる。そのあとを引き継いで、ジャックが再度胸元を押しした。

その連携はしばらく続けられた。だが恭夜は一向に息を吹き返す様子はない。

もう無理だ……。

ジャックが冷静であればあるほど、悲壮さが漂ってくる。

テイラーはその光景と腕時計を交互に見ながら肩を落とした。時間が経ちすぎてい

るのだ。もう、生き返らない恭夜に必死になるジャックを見ているのがテイラーには辛い。

「ジャック……」

初めてテイラーはジャックを可哀相だと感じた。何度やっても無駄なことに、この男はそうすれば恭夜が生き返るとでもいうように、必死になっている。

「ジャック……頼むから……」

死んでしまった相手に電気ショックを何度も繰り返す姿を見ていると、たまらない気持ちにテイラーはなる。もう、彼をそっとしておいてやるべきじゃないのか？ そんな思いがテイラーの瞳に涙をうっすらと滲ませた。

「キョウッ！ 息をしろっ！ 息だっ！」

パアンとジャックの平手が恭夜の頬を打った。

医療班の人間はジャックに哀れむ瞳を向けつつも機械的に蘇生を試みていたが、諦めの雰囲気は漂い始め、作業の手が止まり始めた。そんな中、ジャックだけが死へ向かってしまった恭夜を呼び戻せると信じている。

「ジャックッ！ よせっ！」

テイラーは、また手を振り上げたジャックの腕を掴む。

「離せ」

刺すような瞳をジャックから向けられ、テイラーは思わず手を離れた。ジャックの薄水色の瞳には何かに取り憑かれたような異様な光が灯っている。

「私は諦めたことが一度もない。キョウを失うこともただ一度を除いて考えたことなどないっ！ 何を突っ立っているっ！ 電気ショックだっ！」

手が止まってしまった医療班に怒鳴りながらも、ジャックは恭夜の胸元を押していた。だが恭夜の半眼の瞳に生気がもう戻らないことを誰もが理解していた。

「——っ！ この役立たずがっ！」

誰も手伝おうとしないのを無視し、ジャックは無駄だとばかりにバックマスクを払い、自らの口で何度も恭夜に空気を送り込んでいる。その唇には血の気がなく、力を失っている身体は弛緩したままだ。

テイラーにとってはこんなジャックも、恭夜の姿も見るに耐えない。

「ジャック、もうよせ。彼が可哀相だ……」

テイラーはジャックを宥めるように肩に手を置いた。だが、ジャックはまったくテイラーの言葉など耳に入らない。

「ジャック・ライアンッ！ もう無駄だっ！ 諦めるんだっ！」

恭夜に覆い被さっているジャックにテイラーは再度怒鳴った。

「無駄じゃない……」

振り返ることなくジャックは低い声で答えた。

「私が悪かった。もっと……もっと早くに見つけていたら……。いや、私が部屋に帰せと言わなかったら……」

テイラーは肩に置いた手を引いたが、ジャックは動かない恭夜の身体を抱き起こした。

「キョウ……ハニー。お前が、いなくなった世界は、私にとって暗闇でしかない。キョウは私のたった一つの光なんだ……。逝かないでくれ……頼む……」

万感の思いを込めた言葉とともに、ギュッと恭夜を力強く抱きしめて、ジャックは身体

を小さく震えさせた。

「ジャック……」

「息をしてくれ……目を開けてくれ。お願いだ……もう一度私に笑いかけて欲しいんだ。キョウ……愛しているよ。お前だけを心から愛している。だから……」

「……」

テイラーは初めて見るジャックの姿に胸が詰まった。もう動かないであろう身体を抱きしめて、ジャックが何度も何度も恭夜に語りかけているのだ。人の生き死にをたくさん見てきたテイラーでも、このジャックの姿は見るに忍びないほど——切なかった。

「テイラー、頼む、ここで私を殺してくれ……」

いきなりジャックはそう言った。

「……何を……」

「キョウは強がりばかり口にするが、本当は寂しがり屋なんだ……。だから私が側にいてやらないと……」

ジャックは愛おしそうに恭夜の頭を撫でている。

彼の肩に顎を載せている恭夜は、すでに青ざめ表情がない。

「……今は……哀しいが……」

テイラーはそんな恭夜を見ながら心の中で何度も謝った。

「私を殺せと言っているんだ」

絞り出すような声であったが、その声に迷いはない。

「ジャック、頼むから……そんなことを言わないでくれ……」

と、テイラーが言ったところで、ジャックが抱きしめている恭夜の口がピクリと動いた。同時に半眼だった瞳が一度だけ瞬いた。テイラーはそれを見た瞬間、驚(きょう)愕(がく)して腰を抜かした。

「ジャ……ジャック、ジャックッ！ う……動いたっ！ 彼が、今、動いたっ！」

テイラーが叫ぶとジャックは抱きしめていた身体を素早く横たえた。すると顎が自然に仰け反り、恭夜の口元がわずかに動いて吐息のような息が薄く短く吐き出された。それを見たジャックは再度、恭夜の胸元を押し、救急班はバックマスクで酸素を吹き込んだ。

「戻ってこいっ！ ここに……私のところに戻ってくるんだ、キョウッ！ 息をしろっ！

息だっ！ キョウッ！ 息をしろっ！」

心臓の上あたりを押している間、ジャックは何度も叫んだ。すると、動かなかった恭夜の指先が、今度は弱々しく動いた。

まさか……。

「……っ……あ……」

呻くような声を突然上げた恭夜は、バックマスクを自ら払いのけて咳き込んだ。瞳に涙が滲みだし、胸に弱々しくも鼓動が戻る。

嘘だろう……。

腰を抜かしたままテイラーはその光景から目を離せなかった。

「キョウッ！」

ジャックは医療班が持ち込んだ毛布を掴み、恭夜の身体を包んだ。そうしてまだ虚ろな表情で視点の定まらない恭夜を腕の中に再度抱えたジャックは身体を包む毛布に手を突っ込み、胸元に手を置くと、鼓動が戻っていることを確かめていた。

「あ、あ、あ、ああ……」

涙目になった瞳を何度も瞬かせ、恭夜は何かから逃れようとしているのか、ユルユルと両手を振り続けている。

「あっ、い、や、だっ……あ……」

「大丈夫だ。もう……大丈夫だよ」

テイラーがいまだかつて聞いたこともない優しい声でジャックは恭夜に囁く。

「や、嫌だ……っあ。あ、言わない……から。ジャック……た、助けて……」

周囲の状況が分からないのか、恭夜は何度も助けてくれと訴え、ジャックの腕から逃げ出そうと力なく暴れていた。

「キョウ、私はここにいる。もう大丈夫だ。マスクだっ！」

恭夜に語りかける口調とは違い、激しい声でジャックはこの光景に驚愕している医療班を怒鳴りつけた。その声で我に返った一人が慌てて恭夜の口にバックマスクをあてがった。

「……」

目を閉じて、必死に呼吸をしながらも恭夜の手はジャックのスーツを掴んでいた。しばらくして息を整えると、ようやく目を開けた。

先程まで生気を失っていた瞳は、涙で濡れながらもジャックの姿を映し出している。

「もう大丈夫だ。私が分かるか？」

不安げな表情をしている恭夜の顔から一度も視線を外さず、ジャックが力強い声で語りかける。すると恭夜は弱々しくも頷いた。恭夜のホッとした顔には、赤みが戻ってきていた。急に心臓の働きが回復したためか、テイラーには恭夜の顔の赤みが普段よりも濃く見える。

「……ツク……」

恭夜が震える唇を動かして何かを話そうとしていた。それを聞き取ろうとしたジャックが腰を屈めると、恭夜は震える手をジャックの首に回した。ジャックは何も言わずに自分の恋人をしっかりと抱きしめ、生きているのを確認するように何度も頭や背を撫でさすっていた。

「……っあ。あ、俺……っ。う……うっ……」

本文 p84～91 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>